

『譚綴』

『プーティーへの招待』

九谷 六口

やはり、冬は寒いですね。如何、お過ごしですか。

左記要綱にて「New Year プレーヤー」を開催いたします。
振るってご参加ください。

・日時：2004年1月11日（土） 14:00～20:00（終了時刻未定）

・場所：メゾン 霞が丘 1203号 「光谷亭」

・参加資格なし（ただし、好きな呑み物、おつまみを持参できる方に限らせていただきます）

・申し込み：2003年12月27日（土）までにメールにて申し込んでください。

・趣向：特になし

何やら毎回、喋る人間に偏りが見られるため、大きな問題になっています。

今回は、参加した方々に近況、ボヤキ、夢、悩み……などを発表していただこうと思っています。

ただし、400字詰め原稿用紙2枚以内（なんてね）主役は、貴方と貴女だッ！

なお、参加できない方をお願いですが、欠席メールに近況などを書いていただければと思っています。参加者に伝えます。

（一）

大前康孝の事務所。大前は、前の会社でみっや光谷夫婦と共に仕事をした仲間だ。今は独立している。光谷夫婦は社内結婚だった。

『来たね。プーティーのご案内。いいねー。前は八月。約半年前か。ちよっと期間があいたけど、もちろん行くね。呑み物か……。良しっ、焼酎だな。良いのを知ってるからな。俺はチーズにもうるさい。毎回、洒落たチーズを持っていくからな。奥さんやメンバーには好評だ。でも旦那は匂いがイヤだって食べない。よし、あれだな。あれにしよう。ポリーのクリーム・チーズ。上等なヤツにしよう。あれなら旦那も平気だ。いいねー。良しっ、ワインも持っていこう。前回までは、プー・パーティーって名前だった。プーが開くパーティー……。とは言え、いくら何でもプーとパーじゃ、旦那が可哀想。プーティーって提案したけど……。俺が決めた名前いいねー』

『スケジュール調整できるかしら……』

この人（ま）
猪熊 理恵の来年の手帳には、既に、びっしりとスケジュールが書き込まれている。理恵も前の会社で光谷たちと仕事をした。光谷たちは職場結婚今、理恵は別の会社に居るが、今度の会社でも持って生まれた姉御肌を遺憾なく発揮している。

『うーん。でも何とかしなくちゃ。返事は、ぎりぎりまで無理ね』

『今回も無理だわ』

かみどり
上村 咲子は、六月に男の子を出産したばかりだ。

『そう言えば、前日も子育てのため出席できませんでしたとメールした。でも光谷さんの返事、気になったわ。貴女がお乳をあげている姿、想像できまんなんて書いてあった。これって、どういう意味。あたしは女よ。光谷さんて良い人なんだけど、いつも一言多いのよね。うーん、残念だけど今回も欠席』

「貴方、光谷さんところで、ホーム・パーティーよ」

（よひな）

四橋 暁子が夫の明夫に言った。暁子は、ある出版社の契約社員。校正を担当している。

今流行のSOHOだ。明夫は、六十三歳。自宅で税理士事務所を開いている。

「おうそうか。いつだ？」

「一月十五日」

「今日は、何日だっけ」

「十二月十三日」

「随分、先だなー。何曜日？」

「日曜日だっけ」

明夫は、来年のカレンダーを見た。

「なに言ってるんだよ。一月十五日は、土曜日だぜ」

「貴方、私に文句言わないでよ。メールに、そう書いてあるんだから」

「光谷さん、ボケが始まったのかなー」

「まあ、自分の事を棚に上げて。光谷さんは貴方より年下。それに、見た目だって若いわ。私、自分より年下だと思ってたの。六月頃二人でお邪魔したじゃない。その時、聞いたの。私より三つ上なんだって」

「だから、何だよ」

「若々しいじゃない。ボケなんて言ったら失礼よ」

「若々しさと、ボケは関係ないっ！」

「で、どうするの。行くの行かないの」

「行くに決まってるだろう。言っといてくれよ」

「まあ、あたしが連絡するの。貴方、自分のPC買ったばかりじゃない」

「メールしてくれよ」

「私のPCは、お仕事用。貴方は、折角PC買ったのにゲームばかり遣ってるんだから。税理関係のソフトでも勉強したら。いつまで経っても手書きシステムなんだから」

「いいだろう。俺が何やるうが。君は行くのか」

「当たり前でしょう。あたしが行かないでどうするのよ。貴方、メールしなさいよッ」

…マンシヨンの友よ。もちろん夫婦揃ってお邪魔します。ところで、一月十五日は、土曜日だけど……。

…失礼しました。十五日は土曜日でした。どうも最近、ボケが始まったんじゃないかと心配です。

ほら見ろ。明夫はつぶやいた。

「貴方、また、マイボトル日本酒にするの」

「そうだよ。あのボトル気に入ってるんだ。実に洒落てる。自分の呑み物だけじゃ何だから、ワインでも持っていくか。君は、何、作るんだ」

「内緒」

暁子が、ひとさし指を口にあてた。

「何、遣ってんだよ。歳を考えろ、歳をっ！」

「あら、こういうことに歳なんか関係ありません。楽しみは楽しみ。私、歳なんか忘れちゃうわ。貴方だってそうじゃない。私たちは、この前のパーティーが初めての参加。貴方は、初対面の人たちにベラベラ好き勝手な事を言ってたわ。幼稚園児じゃあるまいし」

「いーじゃないか。連中、気さくで開けっぴろげ。俺にピッタリだよ」

「ねえ、何だか、貴方と光谷さんで似たところがあるわね」

「何が」

「男のくせに、お喋り」

「五月蠅いなー」

「でも同じマンシヨンに居たっていうのに、光谷さんと知り合ったのは、今年の四月」

「光谷さんには、子供が居ないから学校付き合いもない。こういうことも

あるよ」

「そうね、私たちの子供は独立しちゃったし。でも変ね。五メートルも離れてないのに」

「これが今の世の中なんだよ。マンションの住民が死んで、何週間もそのままだったなんてニュースがあるじゃないか」

「嫌ね。あーイヤだ」

「そんな話をしてるんじゃない。何を作るかって聞いたんだ」

「寿司にぎり」

「おいっ、にぎり寿司じゃないのか」

「寿司にぎりッ!」

「何だ、そりゃ」

「当日まで内緒」

暁子は、また指を立てた。明夫は、こんな暁子が好きだった。

すがのかつみ
菅野克己とマキ。

「カツ、名前が変わったよ。プーティーだってさ」

マキは、色白で可愛い顔をしているが男のような話し方をする。克己は、もう少しなんとかと思うがマキはお構いなし。

「えっ、プーティー? 今まででは、プーPartyだったけど。光谷さん、どうしたんだろう。君、どうする?」

「あんた次第よ。どうせ好き勝手に決めるんだから」

「良く言うよ。そっちも自分勝手に何やかんや言うくせに」

「あれ、とやかく言った事あったっけ」

「掃除しろ、掃除しろってうるさいじゃないか」

「何言ってるのよ、それとこれは違うじゃない」

「同じだよ」

「細かい事に目クジラたてるなんて、あんたって、そんな男だったの」
「……」

「……」

「そんな睨まなくなつて良いだろう。判つたよ、今度から掃除するよ」

「それでイーのよ」

「ただし自分の部屋だけ」

「調子が良いんだから。怒るわよ」

二人は、昼食を取り始めた。何か忘れている。

「マキ、さっき何か話してたよね」

「そう言えば……。あんた思い出してよ」

「光谷さんだよ」

「あつ、そつだ。あの入、幾つだっけ」

「俺より十八歳上だよ。だから、えーと、五十七歳」

「もう二年ね。働く気、無いのかな。何度が遊びに行つたけど、あそこ生活臭さなのよね。奥さんも同じ。あんたは、前の会社で一緒だつてしょ。どんな感じだった」

「どう言えば良いのかな。何と申すか、そこそこ遣るし、とにかくあの人が居ると場が明るくなる事は確かだったな。でも……」

「何よー、話を途中で止めて。男でしょう。ハッキリ言つてよ」

「あーいう人って今の会社にも居ないなあ。何だか仕事してるんだか遊んでるんだか判らない人だったな」

「光谷さんて……このままで良いのかなー」

「そう言うのを、余計なお世話って言つんだよ」

「あたしが、なにを話してもイイじゃない」

「あそこは夫婦独立採算。生活費は、お互いが負担し、後のお金は干渉せずなんだって」

「あたしも聞いたわ。奥さんは、仕事しているから問題はないとして、旦那の方は、これから貯金を切り崩して生きていくことになるのよね。前の会社は給料少なかった。あんたも少なかった。それに、あの人は、プツ

ン自己都合退職。退職金だって少なかったはず。心細いに決まっているわ」
「マキ、それこそ余計なお世話だよ。いい加減にしなよ」

「ウルサイわねー」

「またー、マキは、すぐ怖い顔するんだから。判ったよ。」免

「ふふふ。あんたのそういうところが、あたし好き」

「マキ、やっぱり何か忘れてるよ。さっき、こんな話してなかったはずだ
と」

「えーと、ブーParty……じゃなくてブーティーだった。あんた行く
んでしょ」

「行くよ。あそこん家、楽しいもんね」

「何、持って行くの？」

「この前は、中華のお惣菜だった。結構、受けたよね。今度も何か探そう。
それにイタリアン・ワイン」

富浦 誠治は、前の会社の先輩。今の会社に移って十数年。一年後に停年
を迎える。

『今度は、俺一人で行こう。八月に初めて夫婦で行ったけど俺は除け者だ
った。俺が話題になったのは、女房が皆んなに聞いた時だけ。女房め、ま
ったく余計な事を聞いたもんだよ。皆さんは、この人の事、どう思ってい
るんですかだって。女房が自分の亭主をつかまえて人に聞くことじゃない
だろうに。なに言われるかと、ドキドキしっぱなしだったよ。光谷が上手
くまとめてくれたけど……。あいつは、あーいう所には機転が利く。行こ
う。何をもって行くか……。皆、ワインだろうから……。よし、紹興酒だ』

…参加します。

…奥さんは一緒ですか？ 箸の準備がありますので。

『箸の準備？ 一人分ぐらい、どうとでもなるだろうに。女房が一緒の方が面白いと思っているんだな。返事なんか書かないよ』

やまのきみひこ
山野君久。光谷の元同僚。彼は、依然として同じ会社に居る。

『また光谷のパーティーか。結構、面白いんだけどなー。でも、いつ行っても、あいつが一人で喋っている。しかし良くも、あー喋れるものだよ。どうするかな。行きたい気持ちもあるんだけど……。返事は後で良いな』

『行きたいな。磨美を見せたいな。そう言えば、まだ旦那と一緒に行った事はないわ。三人で行こうかしら。でも、磨美は風邪気味。時間があるから治ると思うけど。とにかくメールしようっ』

永川智美は、早速PCに向かった。

.. 娘が風邪気味で、ちょっと心配ですが出来れば親子三人でお邪魔したいです。

.. ワーツ！ 素晴らしいな。娘さんにも会いたいし、旦那にも会いたい。娘さん、一つだったと思うけど心配だな。とにかく小さい子の扱いが判らない。食べ物も飲み物も判らない。済みませんが持参してください。風邪なんか、すぐに治りますよ。楽しみです。

『ふふっ。光谷さんらしいわ。あの人って裏表がないから。そうね、そのまんまって感じかしら。この前、娘が母乳を飲みませてメールしたら、娘さんだから、まあ許せるけど、息子だったらブン殴る。そんな勿体ないだって。変な人。なに考えてんのかしら。そういうば、会社で同じフロアだったことがある。一緒に帰ることもあったわ。いつも混んだ電車に乗りうつって言った。魂胆、見え見え。でも不思議にイヤらしくないのよね。一度、混んだ電車に乗ったけど、必死になって体を離そうとしていた。ふふ、口だけ男。でも可愛いところあるわ』

「輝樹っ、この前、猪熊さんと光谷さんのお宅に行ったって話したわよね。来年の一月十五日にパーティー遣るんだって。私、磨美と行きたいの。貴方も一緒よ」

「……ほかの人は、知り合い同士。でも、僕にとっては初めてなんだよ」

「そんな事、関係ないじゃん」

「でも…… 何で俺が行くの」

「だって、電車じゃ無理よ。磨美の風邪が心配だし」

「……だったら無理しない方が良いんじゃないか」

「輝樹は、いつもそうなんだから。私は、皆に磨美を見せたいの。来た人だって喜んでくれるわ。磨美って可愛いもん」

「二人の娘なんだから可愛いに決まっているよ。でもね……」

「良いじゃない。じゃー、二人が電車で行って、磨美が風邪をこじらせても良いの」

「……」

「ねー、三人で車で行こうよ」

「……」

「じゃー、こうしようよ。とにかく行く。で、貴方が詰まらなそうだったら途中でも帰る。違っわね。貴方じゃなくて、磨美が詰まらなそうだったし騒いだら帰る。これで良いでしょう」

「何だか変だね。磨美は外では騒がないよ。もう家と外を知っている。それに磨美は、詰まらないなんて言葉、まだ知らないよ」

「そんな事、言ってるんじゃないのっ！ 私は磨美と行きたいの。それに貴方も自慢したいし……」

「判った。行くよ」

「あのね、私、母に教えてもらった煮物を持っていくわ」

「でも、あれは時間が掛かるよ」

「平気よ。鳥の手羽と長ネギ、卵、それに椎茸。美味しいもん」

「他にほっ」

「そうねワインかしら」

.. ほぼ確実に行けそうです。でも、娘が一緒ですので途中で帰るかもしれません。駐車場はありますか？

.. 全く問題ありません。終了時間は未定ですから、十分でも二十分でも何時間でも構いません。来てくれれば皆喜びます。駐車場は、マンションの中庭でOKです。

そうか三人で来てくれるんだ。これは楽しくなるぞ。

(11)

申し込み締切日が近付いた。

猪熊理恵は、スケジュールを調整し終わった。

.. 楽しみにしています。参加です。メンバーは、何人くらいですかー。

.. いやー、ホツとしました。理恵さんが居ないパーティーなんて、

「コーヒーを入れないクリースのようなもの。あれっ、違ったかな。

『またー、つまないギャグ』

理恵は相変わらずだなと思った。続きを読んだ。

.. 今のところ、参加者は、我々を含め、十人と半分。半分は驚かないでくださいよ。永川さんが娘さんを連れてきます。それに旦那さんも一緒です。

『永川さん…… 嬉しいな。旦那さんに会うのも久しぶりだし、磨美ちゃ

んには、まだ会ってないわ。ワイン持って行く」

…永川さんに会うのは、久しぶりです。楽しみですよ。おつまみは、和風、洋風、どちらが良いですか。飲み物はワインです。

…和風、洋風、どちらでも構いません。理恵さんが来てくれれば、後は、何も要りません。理恵さんの楽しい会話、これが最高のおつまみです。

『まあ、相変わらず歯の浮くような……』

理恵は、豊満な胸をゆさゆささせた。

光谷はメールを送った後で、八月のパーティーを思い出した。

「だって、仕方ないんだもん」

四橋夫妻と理恵は、この時が初対面だった。他の連中は状況を知っているが四橋は知らない。四橋が聞いた。

「じゃー、お見合いは？」

「えー、もう何十回と……。でも、ピンとこないんですよ。何でなのか良く判らないんですよ……」

「そう。でも、こればかりは縁だからね。ある日、気が付いたら一緒になっていたりしてね」

「私ー、縁がないのかしら」

「い、いや、そんな事はないと思うよ。明日かもしれないし、明後日かも知れない。突然、目の前に現れる事だってあるよ」

光谷は、理恵が入社した頃を知っている。

「私の夢は、結婚ですよ。私、結婚したいんですよ」

確かに、すぐにでも相手が見つかるような女性だ。可愛い顔、何処となく甘えたような話し方。それに、素敵な体付き。光谷も綺麗な胸だろうかなどと妄想したことがある。

理恵はテキパキと仕事をこなした。発想が良いのだ。目的を理解すると、
とやかく考えずに最短距離を選び結果を出す。てらいがない。経験豊富な
上司も、エツと声をあげるほどだ。上司曰く、目からウロコって感じ。

だが、世の中は判らない。本人の夢は、まだ夢のままだ。
「私、五年前にマンションに移りました。だって、いつまでも親元なん
て……」

聞いたのが誰だったか忘れたが、

「危険じゃないの。一人暮らしなんて」

「全然っ！　だって、部屋に居るのは寝る時だけですもの」

「どう言うこと？」

「私、忙しいの。仕事でしょう、それに呑み会とかパーティーとか……」

「呑み会って、そんなに多いの？」

「えー、一週間続けてって事もありますよ」

流石に光谷も驚いた。

「疲れないの」

理恵は、光谷を見てニコツと笑って言った。

「平気。私、健康だから」

光谷は、改めて理恵を見たが、今も健康美に溢れている。

「でも何故？」

理恵は、真顔になって言った。

「だってー。やはり一人って寂しいの。お誘いを断ったりしたら……も
しかして、もう誘ってくれないんじゃないかと思うの……」

「理恵ちゃんだったら、そんなことないよ」

「光谷さんは、素敵なお様と一緒に。だから、そんな呑気なことを言えるん
だと思うわ」

何で理恵のような女が一人にいるのか。そのように考えるのは光谷だけ
ではなかった。

富浦は、一年後に停年を控え、あれこれ考えていた。

『ブーティーには何人もが来るんだろうな。でも、昔の仲間が多い。話題にしても良いかな。遣りたい事はある。それに、まだ隠居などするつもりはない。一人で遣っても良いけど、出来れば気の置ける者と遣った方がストレスは溜まらないはず。光谷は遊んでいる。光谷を巻き込んで良いかな。でも、あいつは仕事をしてるんだか、遊んでいるんだか判らないところがある。ま、良いか。メールでもしてみよう』

…私は、そろそろ何です。共通な事があると思います。ついては、一緒にどうですか？

…共通と言っていますが、四人組みですか？ 私は、あの遊びを卒業しました。疲れるだけ。他に何かありましたか。あつ、二人共、力ミさんを愛してるって事ですか？

『こりゃ、駄目だ。真剣味がない』

富浦は顔をしかめた。富浦は、人が良いとの評判を持つ男。顔をしかめるなど珍しいことだ。

山野に突然の用事が出来た。実家に帰らなければならない。

…調整できるかと思いましたが、金沢の実家に行かなければなりません。親戚の見舞いです。次回です。

…残念です。次回もブーティーの名前かも知れませんが連絡します。

『俺と同じ年だけど、もう光谷はブーティーのままじゃないかな』

十二月二十七日。参加者が決まった。総勢十一人と半分。

(三)

四橋夫婦の部屋。

「君、どうしても僕は気になるんだ」

「えっ、何が。私、今忙しいのよ。貴方は全く大掃除しようとしainんだから。自分の部屋ぐらいしたら。漢字を覚えるなんて言って新聞だらけじゃない」

「これが良いんだよ」

「これの何処が良いのよ」

「文豪的雰囲気」

「なに言ってるのよ。年が明けたら全部捨てますからね」

「駄目だよ。大切なものだ」

「何が大切よ。私にとっては」ミッ。捨てるって言ったら捨てます」

「そんな事をしたら承知しないぞ」

この夫婦は、些細な事でも言い出すと互いに後に引かない。暁子は氣を取り直して聞いた。

「ところで氣になるって何なの？」

「夫婦には隠し事があってはいけないと思うんだ」

「そうね、一般的に考えれば隠し事って、いけないわね」

「そこでだ、教えてくれ」

暁子は、ちょっと動揺した。そして、あの事かな、あれの事かなと頭を巡らせた。だが総て氣付かれてはいないはずだ。強気な姿勢に戻った。

「何よっ！」

「寿司にぎり……」

「なーんだ。駄目っ！」

「ケチっ！」

教えてしまえば大したことではないのだが、新聞紙の件で意見が対立している。互いに意地を張ってしまった。何と、暁子はアカンバーをした。

このような状態のまま四橋夫妻の今年が終ろうとしていた。

猪熊理恵は、外出にかかわる事に関しては総てを綺麗にする。お化粧、服、靴、バッグ……。当然、下着にも気を使っている。もっとも光谷が下着について調べた事はないが。

『年末って言ったって大掃除する時間なんてないわ。万年床はいけないうとだけど、万年ベッドなら良いのよね。私、ベッドにして良かったわ』
こうして理恵は新年を迎える。

「カツ、やっぱ無理」

「何が」

「この部屋、吹き抜けがあって格好良いけど上の方の窓ガラスは拭けない」
「でも三年間、拭いてないよ」

「絶対に届かないよ。あんた、やってみたら」

「う、うん」

「光谷さんとは、亭主が窓ガラスを拭くって。あんたも亭主、少しは見習ったら」

「あちらはあちら。こちらはこちら」

「いくら好きだからって大晦日にクジラの写真を見ている事はないでしょう。少しはPCから離れたらどうなの。手伝う気ないの」

「俺と一緒に買い物に行った。クリスマスには素敵な食事に連れて行った。こんな良い亭主はいないよ。光谷さんなんか一年に一度か二度だってさ」

「何が？」

「奥さんを食事に連れて行くの」

「でもガラス拭きをしてくれる方が、あたしは良い」

「あっそー。じゃー、もう連れて行かないよっ」

「……」

「またー、そんな凄い目付きして。判ったよ。これから連れて行くよ」

「窓ガラス、どうするのよッ！」

「梯子でも買わないと無理だな」

菅野夫妻は、汚れた窓ガラスを見つめながら、テレビから流れる紅白歌合戦を聞いていた。

大前は、大晦日だというのに業績グラフを睨んでいた。

『今年は事務所開設以来、最高の収益が上がったな。いいねー。だが、しかし、好不調がテレコなんだよな。歴史は繰り返されるからな。来年は下がるのかなー』

家族は甲斐甲斐しく正月の準備をしているが、康孝は自室でグラフと睨めっこ。新年を迎える喜びと、仕事の不安を抱きながらカレンダーを取り替えた。

富浦誠治。真面目で心優しい男。年末は、てんてこ舞い。女房は地区婦人会の幹事だ。子供は米国留学で日本にはいない。

「ねえ、大掃除は？」

「あら、私は、婦人会の年末行事が忙しいのよ。そんな事、お判りでしょう」

「だから？」

「貴方しかおりませんわよ、お掃除をする人は。宜しくね。そうそう、おせち料理ですけど近所のスーパーで売っていると思うの。貴方、買ってきてくださらない」

「婦人会の帰りに買ってきてても良いんじゃない」

「ご存知のように、私は何事にも一所懸命になりますの。今は婦人会のことで頭が一杯。夫婦は、お互いに愛し合い、協力し合うものじゃないかしら。私は婦人会に行きますわ」

「お互いに愛し合う……？」

この状態は大晦日まで続き、どうやら、このまま正月に突入する模様だ。

永浦家では、磨美の風邪も治まり平穏な大晦日を迎えていた、が……

「智美、何となく気になる事があるんだけど……」

「あら、何？」

「悪い出したんだけど、二人が恋人だった頃、君って光谷さんと同じフロアーで仕事してたよね」

「そうよ」

「あの頃、よく光谷さんの話が出たけど……」

「だから」

「何かあったの。それに今も会いたがっているようだし」

智美は、ピンと来た。へー、この人もそんな事、考えることがあるんだ。「なに言ってるのよ。何もある訳ないじゃない」

「そうかなー。混んだ電車の話とか……。送別会の帰りに花束を持ってあげたとか……」

「だって途中まで帰り道が同じだもん。あの時、こんな大きな花束を持って電車に乗るのは恥ずかしいって真顔で言うから」

「光谷さんにとっては会社最後の日だったよね。そんな大事な日に、一緒にだったんだ。しかも、夜……」

智美は、噴き出しそうになっている。

「そうね。そう考えると意味深ね」

「意味深？ 頼む。怒らないから話してよ。何かあったの？」

実際には何も無い。それに送別会の帰り、光谷は途中下車したのだった。後で聞いた話だが、腹が痛くなりトイレに駆け込んだらしい。艶気なんか何処にもない。でも、智美は、ちょっとからかいたくなった。

「あの日、光谷さんは吞みすぎたらしくて急いで帰ったわ。でも私、色々と相談させてもらったわ。私の人生において最も大切な事なんかを」

智美は演技した。遠くを見る目つき。

「何も無いなんて言ったくせに。智美にとって最も大切な事を相談できる間柄だったんだ。いや、僕は怒らない。絶対に怒らない。何を相談したん

だ。話して欲しい」

「こうなると女は、猫のようなもの。獲物をじらす。

」さっき怒らないって言ったくせに目は怒っている。そんな輝樹ってイヤッ！」

「……判ったよ。お願いだ、話してよ」

「絶対に怒らない？　じゃー、指ぎりゲンマン」

大晦日、二人は指切りゲンマンをした。

「ウソついたら針千本、のーますっ」

何とも仲が良いと言っか、

「あのね……」

急に智美に目付きが変わり、形相も変わった。結構、厳しい雰囲気。

「貴方が、なかなか結婚しようと言わないから、光谷さんに愚痴をこぼしたのっ！　全く貴方は、遣る事が遅いんだからっ！　私がどれだけ気を揉んだか、貴方、判ってるのっ！」

「えっ！　あのー、いやっ、その……でも、磨美を作ったのは早かったよ」

な、何と、磨美が寝たのを見計らい、元日前夜、大晦日だと言うのに、二人は……。

(四)

年末になると亀子は、いきなり張り切りだす。大掃除だ。亀子？　光谷の奥様だ。日頃の掃除は、燦慧の担当だ。燦慧？　実に難しい名前だがアキラと読む。光谷家の亭主だ。

亀子は、フラワーデザイナー。月に四、五件の仕事が舞い込む。ブティック、ジュエリー専門店、トラッテリア……。ホテルなどの大きな仕事は、年に一、二度程度。仕事のほとんどが口コミだ。週に一回のデザイン教室も担当している。評判は、結構良い。

普段、亀子はほとんど掃除をしない。燦慧は不思議だった。綺麗な花を扱う仕事、しかも亀子は美しくデザインする。仕事振りを見に行った事があるが、花びら一つまで掃除する。外ではやるが家ではしない。だが、年末だけは別だ。半狂乱状態で掃除をしだす。

毎年の事だが戸惑いを感じた燦慧は、かつて聞いた事があった。亀子は答えた。

「だって、一年に一度位、掃除をしなければ塵だらけになるじゃない」
その時、燦慧は言った。

「だったら普段から掃除をしていれば、そんな、ひっちゃ気にならなくて済むのに」

「変なことを言わないで。全然、貴方は判っていないわね。普段、掃除が出来るくらいなら苦労はないわ」

「普段、出来ないって、時間はあるじゃないか」

「あー、判ってない。時間があるかどうかなんて関係ないのっ！」

「じゃー、何だって言うの」

「もうイヤ。私はね、遣るときには徹底してやるの。貴方は、私が掃除嫌いだと思っているんでしょう。違うわ。徹底してやっちゃうから普段は出来ないの」

と言いながら、本当に狂ったように掃除をしている。燦慧には、この理屈が良く理解できない。確かに一年に、たった一度だが掃除はする。しかし年に一度だから汚れが取れないのではないかと思う。それに嫌いじゃないと言うが、滅多に掃除しない人を一般的に掃除嫌いと言うはずだ。だが、今、そんな事を言ったら大変な事になる。触らぬ神に祟りなし。燦慧は、この格言を信じている。

燦慧は、亀子の母親から聞いた話を思い出した。

「いえね、躰はしたつもりなんですけどねえ。そういえば、こんなことがあったわ。私の母が具合を悪くして寝てたの。私、出掛ける用事があって

亀子に掃除を頼んだのよ。帰ってきたら綺麗になつてないの。そしたらね、母が、あの子、丸く掃除するねって。私、不思議だったわ。だって布団があったのよ。掃除する部分は狭いわね。そこを丸く掃くなんて。どうやったのかしら。母も母、その時にキッチンと掃除しなさいって言ってくれば良いのに。でも、私は二人が一緒になる前にハッキリと言いましたよね。掃除も出来ない娘だけどって。その時、光谷さんは、そんなこと構いませんって言ったわよね。私、ちゃんと覚えていますからね」

光谷は、親の謙遜だと思ったのだ。しかし、この言葉は紛れもない真実であつた。

もう一つ思い出した。まだ二人が付き合っていた頃のことだ。亀子の家に招かれた。夕食を作る間、亀子の部屋に居てくれという。燦慧は一人でソファに座っていた。部屋を見渡した。タンスの上に写真立てがある。どんな写真なんだろう。タンスの上にはビロードであろうか柔らかそうな布が敷いてある。へー、変わった布だな。燦慧は指で触った。ど、どうしたとか指の跡がクッキリと付いた。何とそれは布ではなく、いわゆる埃ほこりの層であつたのだ。綺麗好きで燦慧は啞然とした。しかし、このまま指の跡を残しておく訳にはいかない。かといって雑巾を借りに行くのも変だ。机の上にあつた本を、そーっと置いた。その本は深々と塵に埋まっていた。その時、光谷は独り言をいった。

『これは、相当な覚悟が要る』

先ほど、光谷家の掃除は燦慧の担当だと説明した。光谷家では各々が担当する事柄が厳密に決められている。何故そのようになったのか。昔に遡り、光谷家の生い立ちについて触れておいた方が良さだろう。

今から二十七年前。つまり結婚直後の会話を再現してみよう。

「私、ずーっと仕事をしていきたいの」

「僕は、帰宅した時に三つ指付かれて、お帰りなさいなんて言われる人生

は嫌なんだ。男と女、総てにおいてフィフティー・フィフティー。そんな人生を歩みたいんだ」

まー、何と言っつか、結婚したての男に在りがちな、格好のよい発言といえる。

「貴方の考えには賛成。私、生活費もお互いに出すべきだと思っているの」
なぜかこの時、燦慧はニヤツとした。

「君がそうしたいのであれば僕は構わないよ。でも生活費に関してはフィフティー・フィフティーというわけにもいかないね。僕の方が収入が多い」
燦慧は、ふっと言葉を切ったが続けた。

「いや多いはずだ。そうだね…… 僕が六割、君が四割。これでどう」

「貴方が、そう言っただったら私はいいわ」

この時、燦慧は将来の見通しを持っていなかったことになる。

「ところで、君が仕事を続けたい理由は何？ 生涯を賭けて続けたい仕事があるんだ」

「ええ、でも一番大きな理由は別にあるの」

「ほー、聞きたいな」

「夫が稼ぎ、妻は家庭。これが一般的だと思うの。でも不慮の事故、病気なんかで夫が死んだ場合、ややもすれば妻は路頭に迷う事になるじゃない」
「まあ、そつだね」

「こういうのイヤなの。だから妻も自立していなければいけないと思うの。

夫が死んで、私が路頭に迷う。こんなの絶対にイヤなの」

「…… 夫って、それ僕のことじゃない。僕が、死ぬんだ」

「だから、一般論って言ったじゃない」

「でも今は、二人の事を話しているんだよ」

「そつよ」

「……」

燦慧は、実に現実的な考えを持つ亀子をこの時知った。だが既に婚姻届は区役所に提出済みだ。亀子は、俺が死ぬ場合も想定し、これからのこと

を考えている。燦慧は亀子に空恐ろしさを感じた。ハンコを押す前に、何故この様な話をしなかったのだろう。時、すでに遅しである。

燦慧は気を取り直した。いすれにしても俺が死ぬ話はこの辺にしたい。話題を変えようとしたが、間髪を入れずに亀子が口を開いた。

「家事だけ」

燦慧が死ぬ話から、急に細かな世界に飛び込む事になる。

「貴方は、すべてにおいてフィフティ・フィフティな人生って言ったけど」

「そ、そうだよ。男と女は、そうで在らねばならないと思うよ」

「料理だけ」

「料理っ」

「そう食事の支度。これも同じで良いわよね」

燦慧は顔色を変えた。

「駄目っ！ 絶対に駄目っ！」

亀子も負けてはいない。ニコニコ笑顔が、急に本性剥きだしの表情になる。そして一オクターブほどトーンを下げて話し出した。いわゆるドスの利いた口調だ。

「あら、そんなの変じゃない。いつも私が作るなんて、さっきの話と違うじゃない。そんなの承服できない」

「とにかく駄目。じゃあ、その代わりに食器は僕が洗つよ」

何しろ埃のビロートを作るにだ。

亀子は自分を振り返った。腹が満たされた後は、お寝んねする事になっている。それに食器洗いややりたくない。

「判ったわ」

この件に関しては意外とスンナリと決まった。燦慧が断固として駄目と言ったのには深い訳があった。

燦慧は独身時代に、若くして結婚した友人たちの愚痴を良く聞いた。男からも女からも聞いた。

「嘘っぱちだったわ。食事は、分担して作ろうねと言ってたけど、三ヶ月位経ったら全部私。それに作らなかつた人が食器を洗おうよなんて言つてたのに、それも全部私。もう嫌っ!」

この話は、燦慧に大きな影響を与えた。そして食事当番に関し、燦慧の哲学が出来上がった。俺は、一切料理をしない。いや、食事を作つてはいけないのだ。

燦慧の論理展開はこうだった。

二人共料理が作れたとする。この場合、きちんと担当日を決めるはずだ。だが、どちらかの担当日にその担当者が、何らかの理由で疲れ切つていたとする。普通であれば、もう一人が優しい気持ちを出して担当を替わる。では、二人とも疲れ切つていたらどうなるのか。二人はソファに身を置き、チラチラと相手を見る。しかし、どちらも何も言わない。沈黙が続く。腹は減つても食い物はない。空腹感は、人間をエキセントリックにする。二人の会話を想像してみよう。

「……」

「……」

この状態が、かなりの時間続く。どちらか一方が意を決して口を開く。

「お腹空いたわ」

「腹減った」

沈黙が続く。妻が口を開く。

「作つてよ」

「疲れてる」

「私も……。たまには、担当、替わつてくれても良いでしょうっ!」

「なにっ! 今日ば、君が作る日だっ。自分勝手を言つなっ!」

その夜は二人とも腹をグーッ、グー言わせながら寝る以外にない。腹が空いていては眠れるものではない。そして数ヵ月後に、二人は同時に家庭裁判所に離婚訴訟を起こすことになる。

燦慧は、食事当番が原因での訴訟など恥だと思っている。それに多分、

調停員も呆れるはずである。どちらが勝ったとしても喜べるものではない。食い物の恨みは恐ろしい。燦慧は、食器洗いを受ける事により、この哲学を頑なに守ったのだ。この成果は大きい。これ以外の事は些細なことではない。

「掃除なんだけど。それに大掃除……」

亀子の表情は、カメレオンのように変わる。トーンは、元に戻っている。人生観については、意気揚々と話す亀子であったが、掃除についてはダークブルーの海の底。燦慧は綺麗好き。掃除はお手のもの。燦慧の頭には埃のビロードがある。亀子に任せた場合を考えると背筋が寒くなる。

「一週間に一度の部屋の掃除。これは僕が遣る」

「本当ッ！ 嬉しい」

亀子は、今、観音様のような顔付き。だが、またダークブルーに。

「大掃除は……」

燦慧は、食事当番に関する哲学を守った事が余程嬉しかったのか、

「ファイティー・ファイティーと言っても君は、女だ」

と力強く言った。それに、君に掃除を任せる訳にはいけない、と言いそうになったが止めた。

「カ仕事は僕が担当するよ。ガラス拭き、風呂掃除、油だらけになるキッチンや換気扇。玄関の床も僕が拭こう。それに照明器具も僕が遣ろう。でもトイレ、ガスコンロ、キッチンの水廻りの掃除は君に任せたい。どっ。」

この時、亀子はニヤッと、ほくそえんだが燦慧は気付いていなかった。

「あら、そんなに沢山。貴方の体が心配」

「はははー、大丈夫っ！」

燦慧は、数年後に自らが背負う腰痛、肩、腕の痛み、眩暈症、その他諸々の病の存在を知らない。此処に燦慧の不幸があった。

この取り決めは正しかった。燦慧は、一度たりとも食事を作った事はな

いし、亀子は、食器洗いと言つ言葉を自分の辞書から抹殺することができた。

話を元に戻そう。

燦慧は閑なため、とくに分担箇所を仕上げていた。だが、エプロンを着てシャカシャカと動き回る亀子を見ると、落ち着かない気分になる。ガスコンロ、食器棚、そして大して汚れていない所まで狂ったように掃除している。

燦慧は、あまた数多なる病のため、約束した箇所以外に手を出すことは出来ないでいる……

と書くとき深刻なようだが、これは正確に言えば燦慧の言い訳でもあるのだが…… なんとなく亀子の雰囲気が変わってきた。ヤバイな。不安が的中した。

「ねー、ポケットしてるんだったら、壁紙でも拭いてっ」

壁紙？ 壁紙は、掃除分担を決めた時にはテーマになっていない。従って俺の役割ではない。それに拭いちゃいけない禁断のスペースだ。以前、何の気なしに拭いたことがある。失敗だった。下手に拭くと段だらマダラになってしまう。拭いてはいけないのだ。

「駄目だよ。シマシマになっちゃうから」

「……」

「あー、ちょっと散歩してくるよ」

「……」

行き先は決まっていた。パチスロ。燦慧は、無機的な機械の前で非生産的な作業をしていると、何故か現実を忘れることが出来た。ある友人が語るには、このような行動を典型的な現実逃避というらしいが……。だが腰痛には適した遊びとは言えない。

家に戻った。

「ねえ、見てよ」

「えっ、何を？」

「此処」

誇らしげに亀子が指差した場所は居間の壁紙。見ると薄茶けた部分と白い部分がくっきりと分離されている。

「だから何よ？」

「ほらっ、綺麗じゃない。ねえ、遣れば出来るの。貴方、こっちの半分、遣って」

普段、掃除をしているのは俺だっ。壁紙など数年おきに張り替えれば良いのだっ！ 燦慧は口に出し掛けたが止めた。じゃー、貼り替えましようなどと言われると大変だ。生活費以外の出費は、両者の話し合いで決まる。亀子が言い出した場合は折半だ。従って、今まで燦慧が言い出した事はない。いずれにしろ分担金が辛い。燦慧の取った行動は、理屈抜きであり早かった。諸々の病は何処に行ったのか。彼は、せっせと拭いた。

「なるほど。確かに綺麗になるね」

多少、卑屈にも見える燦慧の顔がそこにはあった。

亀子は、自分を大切にした。同じように周りの人も大切にとの思いを持ち暮らしている。燦慧も、この事は認めている。しかし、大掃除の時期になると、この思いに疑問を持つことがある。何故、俺はこのように必死になって壁紙を拭かなければならないのか。俺は大切に扱われているのだろうか。

だが、燦慧は、ある信念を持っていた。

『時を遡る事は、出来ない』

亀子にプロポーズしたのは自分。今、考えると我が人生唯一の暴挙だった。亀子は、躊躇もなく快諾した。後に理由を聞いたが、一度くらい結婚を経験しても良いかな。駄目だったら別れちゃえばいいし、とのがく軽い気持ちだったそうだ。

暴挙と軽い気持ち。どうであれ、自分が能動で亀子が受動であったことは確かだ。この事実を消し去る事は出来ない。日本史に書かれる事は永遠

にないが、自分史にはこの事がクッキリと刻まれている。自分にとつての揺るぎない歴史である。諦めではない。壁紙くらいが何だって言うのだ。燦慧は、これで良かった。今、腰は痛くない。

大掃除の話からは離れるが、もう少し亀子について知っておこう。

亀子を知る人は素敵で爽やかな人と言う。燦慧に言わせれば、外ヅラ女なのだが他人は内ヅラを知らない。亀子は自惚^{うぬぼ}れた女ではない。自分に対する評判など意識しなかったが薄々は自覚していた。悪い気持ちではない。「亀子さんて幸せそう。悩みなんかないみたい」

だが、亀子にも悩みがあった。

『亀子なんて変な名前』

思えば不思議な名前である。遠く江戸時代、明治、大正、昭和初期であれば何も問題はないのかも知れない。いや、当時であったとしても多分、亀子ではなく亀のはず。子が付く事により、そこはかとなく奇妙な雰囲気をかもし出してしまうのだ。この名前を付けたのは、当然ながら亀子の父親、喜久蔵であった。

喜久蔵は亀が大好きだった。生命力もあり、しかも毎日毎日をゆっくりと静かに確実に歩む。人間もこの様で在らねばならない。我が子供には、この名前を付けたい。

この信念は揺るぎないものであった。息子であれば亀蔵、娘であれば亀子。亀ではなく亀子にした理由は単純だった。亀では時代錯誤であるし、年寄じみた印象を与えてしまう。子を付ける事により、それらのイメージを払拭^{はきりぬぎ}できる。確かにこの考えは、鶴と鶴子、菊と菊子などであれば通用すると思うが……。

娘が産まれた時、喜久蔵は妻に言った。

「この子の名前は、亀子」

妻は、ビックリした。

「昭和の時代に、この子が可哀想そうです。これでは余りにも……」

喜久蔵は、涙して訴える妻の言葉を聞いていなかった。そして、この子を亀子と命名し区役所に届けた。さすがに区役所の地方公務員も驚いた。

「こ、これで良いんですか」

喜久蔵は、区役所内に響き渡るほどの大声で言った。

「私の愛する娘だ。赤の他人である貴方に、とやかく言われる筋合いの事ではない。君ッ！ これ以上難癖を付けた場合、職権乱用だよ。口を慎みたまえ」

地方公務員は、かなりムツとしたが、そのまま届出を受けた。そして思った。世の中にはいろんな人がいる。

亀子は常日頃、思うことがあった。子供の名前って何だろう。親の思いかしら？ では、自分の思いは……。以前、この思いを燦慧に話したことがある。燦慧も言った。

「同じだね。僕の場合、誰もアキラって読めない。それに両方とも難しい漢字だから中学生になるまで自分の名前を書けなかった。両方で三十二画だよ」

「どっしたの？」

「カタ仮名で書いてた。きちんと書けない先生もいたよ。でも、燦慧は行きすぎだよ。漢語字典を調べた事があるけど、名乗なのもりを見ると両方ともアキラ。だったらせめて一字で良かったのに。親父に聞いたことがあるよ。何んでこんな漢字を使ったのかって」

「何だって？」

「これくらいの字をスラスラ書けるような人間になって欲しかったんだって」

「そう言われれば、そうね。お父様の考えは正しいわ。さすがね」

「……」

「でも、お父様の名前は、一でハジメよね。親と子供で随分極端ね」

「お袋から聞いたんだけど、親父の本心は別にあつたんだ。習字で自分の名前を書く時があつたんだって。一だからすぐ終っちゃう。詰んなかったんだって。子供にはそんな思いをさせたくないって。必死になって人名用漢字を搜したらしく」

「でも私に比べれば、良いんじゃない。亀子よ。名前、変えようかしら」

「今更、変えたって意味ないよ。亀子で通っているんだから。それに……」
「何……」

「考えてもごらんよ。この狭い日本に一億二千万の人間がひしめいている」
亀子は、また燦慧の誇大妄想癖が出てきたなと思った。

「ひょっとしたら亀子なんて名前は、君だけでも知れないよ。これって素敵だと思わない」

亀子は、全く素敵だとは思わなかった。

「存在感だよ、存在感。何かの拍子に亀が注目を浴びる事があるかも知れない。そうするとテレビ局が亀子って名前の人を搜す。そうなってご覧。君は一躍有名人だ。僕だったら嬉しいな」

亀子は、そんな事は金輪際ありえないと思った。止せば良いのに燦慧は続けた。

「素晴らしいな。その時、君は自分の名前に感謝することになる」

興奮して話していた燦慧だが、気付くと亀子はいなかった。変だな？

判ってもらえないのかな。搜すと亀子は奥の四畳半で仕事をしていた。その後姿は、そこはかとなく寂し気だった。燦慧は無言のまま亀子に語りかけた。

「亀子、夢を持ちなさい。世の中、何が起るか判らない。『君の名は亀子』なんてドキュメンタリー特集番組が放送されるかもしれない。その時は僕もテレビに出演できるんだよ。夫婦揃ってテレビ出演だ。人間、夢を失ってはいけないよ」

燦慧の表情は優しかった。

とにかく亀子の大掃除は続いた。元旦を控え亀子は掃除をしながら考え

ていた。

昔の事が頭の中でグルグル回っている。出てくるのは、ニコニコ笑う燦慧の顔。振り払っても、振り払っても、その顔は出てくる。良い人なんだけど、何処かズれている。大掃除の手を休めた。私たちって、こんな夫婦で良いの？ 台所にペタンと座った亀子がいた。

同じように燦慧も物思いに耽っていた。場所はベランダ。手にはフィリップ・モリスのタールーミリグラム。寒い。しかし、掃除を言い付けられるかもしれない。部屋に入る気は起きなかった。今年も終る。いろいろな事があったな。だが、何と一年が経つのは早い事か。ふと大前のメールを思い出した。

…一年間の長さに対する感覚は、年齢分の一と言われています。幼稚園児であれば、六分の一。光谷さんの場合は、六十分の一です。

光谷は、この時、なるほどな—と思った。だが大前には頭にきた。正確ではない。

…賛成出来る。だが、俺は五十七歳。まだ六十分の一ではない。失礼じゃないか。

大前からの返事はなかった。

寒い中、燦慧は、まだベランダにたたずんでいた。遥か昔の出来事が、走馬灯のように蘇って来る。学術的な事、ビジネスに関わる事、これら以外の事柄に関する記憶力は抜群だ。第三者に良く言われる。そんな記憶って何かの役に立つの？ いや第三者など、どうでも良い。燦慧の頭の中には、昔の恋人たち、小学校一年の時に母親、姉弟と行った母の実家での出来事……。

母の実家は淡路島にある。そう、あの時は夏だった。側には川が流れ、周りには水田。カエルの鳴き声が凄かった。畦道を見ると小さなカエルが無数に飛び跳ねていた。何匹も捕まえた。祖母に七輪と餅網を用意してもらい火を熾した。そして餅網に並べて焼いた。驚いたのは母だった。何をしてるのっ！ 止めなさいっ！ その時、祖母が言った。良ーじゃないか、この子は遣りたい事を遣ってるんだから。

何故あのような事をしたのか、未だに判らない。カエルは食べなかった。遠くには除夜の鐘。どんな縁なのかは判らないが、プーティー参加者もこの除夜の鐘を聞いているのだから。

(了)

此处で筆者は筆を置いた。満足気に両手を頭の後ろに持って行き伸びをした。

そうなんだよな、あの地方公務員ではないが世の中にはいろいろな人がいるよなー。

その時、奥の部屋から妻の声がした。

「貴方っ。今日は土曜日だけど、明日にするの？」

「何のことっ」

「掃除っ。最近、適当だけど土曜日の約束じゃなかったーっ！」

「あ、明日にするよっ」

「何故っ？」

「今、ちょっと手が離せないんだっ」

「へー、何か遣ってるのっ？」

「書いてるんだよ」

「何をっ？」

「プーティーの物語」

静かになった。気付くと後ろに妻が立っている。

「貴方、プーティーは、まだ先よ。遣ってもいない事、どうやって書くの」

「……」

「そういう甘い考えで人生を送るのって、私、イヤだな」

「……」

筆者は筆を持ち、また書き出した。

(五)

プーティーに参加するメンバーは、滞りなく元旦を向かえ、滞りなく終えた。良い正月だった。正月三日。光谷家では年賀状、年賀メールの整理も終り、書くべき返事も出し終わっていた。ノンビリとした一日……。

PCに向かっていた燦慧にメールが入った。

… 本当に残念ですが、参加できなくなりました。理由は、いずれお知らせします／理恵

いずれ知らせる？ あんなに楽しみにしていたはずなのに。

… 判りました。理恵ちゃんにとって、余程、大事な事が起こったのでしよう。プーティーは何カ月後にまた開催します。その時は来てください。もし、良かったら何が起こったのか教えてください。いつでも良いです。理恵ちゃんがメールしたいと思った時で……。

何が起こったのだろう。燦慧は気になった。

プーティー二日前。燦慧のPCにメールが入った。

富浦のメールだ。

…風邪だよ。酷いんだよ。インフルエンザじゃないかと思うほどなんだ。幼い子も居る事だし……。折角、紹興酒、買ったのに。今度、とっかで会おうよ。

…当日、紹興酒を持ってきてよ。俺が受け取ったら帰って良いから。

富浦から返事はなかった。

メンバーが減っていく。

「ねー、プーティーの準備だけど、まだ良いの？」

「私はね、後片付けは苦手だけど十人ぐらいのパーティーの準備なんて、前日の午後からで平気。後片付けは貴方よ」

燦慧は、こんな時に後片付けの話などと思ったが黙っていた。

どうしたのだ。続々とメールが入る。今度は、大前だ。

…テレビで好不調が来ます。この順番でいくと今年は不調の年です。行きたい気持ちとグラフが頭の中で喧嘩しています。クリームチーズを持って行くつもりでした。それに素敵な焼酎……。ところがビツクリ。正月だというのに、ちょっと大きな話が入ってきました。十二日にプレゼンです。光谷さん、このジnkスを私は破りたいのです。判ってください。

…了解。皆勤賞の大前さんです。一度くらい不参加があっても良いのでは。成功を祈る。

ま、良いか。まだ七人と半分。燦慧は、別件でPCを操作していたが、何とはなく理由のない不安に包まれる自分を意識した。この様な場合には

環境を変えるのが得策だ。

「あのね、散歩に行く」

「腰が悪いんだから、ちゃんと散歩するのよ。たまには運動をしなさいね」
「……」

この日、燦慧はメタメタに負けた。正月早々、縁起でもない。家に帰った。

いつもの習性でPCをONにする。メーラーをクリックした。ダダダッーツと受信トレイにメールが並ぶ。楽天、日経BP、ライオンハート首相官邸、Hサイトのご案内……。そして参加メンバーからのメール。参加者からのメールは読まなければならない。気を付けながら他のメールを削除する。当然中身など読まない。Hサイトのご案内が、ちょっと気になったが未承諾広告であり、URLをクリックしたりすると面倒な事になる。見たい気持ちを抑え削除。

さて、メンバーのメールを読もう。

永川智美からのメール。写真が添付されていた。

..もう大変でした。三人で実家に行ったのですが、磨美が階段から落ちて足を骨折しました。今はギブスをしています但本人はニコニコしています。お医者さんは、大人は三、四ヶ月かかるけど、この子くらいだと三、四週間で治るよと言ってます。本当でしょうか。プーティー残念です。夫も残念がっています。磨美も……、磨美はまだ判らないようですが。皆さんに宜しくお伝えください。

燦慧は写真を開いた。可愛い女の子が足にギブスをして笑っている。確かに元気そうだ。回復は早いかもしれないな。でも骨折じゃ無理だ。

…大変でしたね。でも磨美ちゃんが元気そうで、ホッとしました。可愛い写真ですね。旦那さんには会っていないけど、多分二人の良いところ取りって感じですね。まだ開催します。その時は三人でどうぞ。皆さんが言ってくれます。二人の良いところ取りって。親として幸せです。本物は、写真よりも、もっともっと可愛いです。次回は絶対に連れて行きます。

菅野からもメールが来ている。まさかドタキャン？ 既に、参加者は、六人になっている。

…大変な事が起こりました。昨年末の数字が悪く会社は危機状態です。緊急にマネージャー以上の会議がもたれます。内容はリストラ実行案の作成です。極秘会議ですので休日を使います。光谷さん、何と十五日です。私も部下の中からリストラ対象者を選ばなければなりません。正月早々、堪りません。もうこの会社に嫌気がさしてきました。済みませんが参加できません。

…委細了解。勇気を持って事に当たって欲しい。この様な苦しみを味わっているのは君だけではない。今の世の中は、失業者だらけだ。チュウインガムは、見てて辛いところがあるが、君はリストラ対象ではないはずだ。嫌気がさしても軽はずみな行動を取るものではない。健闘を祈るっ！

光谷さんは、たまに訳の判らない事を書いてくる。

…お気遣いありがとうございます。ところで、チュウインガムって何ですか？

…良く濡れ落ち葉と言っだろう。今は、そんな時代じゃない。濡れ落ち葉だったら指でつまめばはがれる。床に張り付いたチュウインガ

△を見てごらん。取ろうと思ってもなかなか取れない。この覚悟でなければ会社には居られないってことだ。君もこの言葉を覚えておいた方が良い。何かの役に立つ。

そうかなー。何かの役に立つのかなー。菅野は、腕組みをして考えた。

これで四人になってしまった。四橋からもメールが入っている。縁起を担ぐ訳ではないが、時間を置くことにした。ベランダに出てフィリップ・モリスに火をつけた。時間を置いたからといって、自分の都合の良いような内容に自動変換される事はない。部屋に入りPCの前に座った。燦慧は、もつとつとでもなれと思っていた。

..参加できなくなりました。

なにー。四橋さんもか。外部参加者ゼロ。

..実は、寿司にぎりの件で夫婦喧嘩になり暁子が出しました。書き置きはありませんが、些細な事で何遍も家出しますから行き先は判っています。北海道の実家です。今から北海道に行き連れ戻してきます。..判りました。飛行機代も掛かるし大変ですね。ところで、寿司にぎりにてありましたか、にぎり寿司の間違えでは……

..寿司にぎりでイイのっ！

燦慧は、気になって仕方がない。

..判りました。ところで寿司にぎりにて何ですか？

メールが来ない。変だな。ピンポン！ 誰か来たようだ。

「はい、光谷です」

「四橋」

玄関を開けると、絆創膏だらけの四橋が立っていた。

「光谷さん、私は貴方を好ましい人だと思っている。寿司にぎりの事で夫婦喧嘩になったって書いたんだ。あんたに、ほじくり返して欲しくないんだ。そんなこと判りそうもんだけどね」

「……？ 済みません。理解不足で」

「俺が、それは何だと去年の暮から聞いた。年が明けても暁子は意地になって教えてくれない」

「じゃー、四橋さん知らないんだ。でも寿司にぎりって、そんなに重大な事なんですか」

「暁子は、プーティーに持っていくって言ったんだよ。亭主として、どんなものか知りたくなるのは当然だろう。君は、どう思う」

「えー、そういう事でしたら気になります。四橋さんは正しい」

「そうだろう。暁子も頑固だが……。光谷さん、そもそも貴方がプーティーを開こうなんて言い出したのがいけないんだよ。見なさい、この顔を」
「」愁傷様です」

「同情なんてして欲しくない。今後一切、参加しませんからね」

四橋は、そう言つと帰ろうとした。

「四橋さん、北海道に行ったら奥さんに寿司にぎりのこと聞きますよね。判ったらメールください」

「……う、五月蠅いっ！」

そして誰も居なくなった。

(了)

筆者は、末尾の一行は何処かで聞いたことがあるなと思った。

だがこの物語の締めくくりとしては、実に余韻のある、素敵な一行だと思った。ポケットしていると、妻が外出から戻った。

「結局、皆、都合が悪くなつて参加者が居なくなつちやつたよ」

「あ、そう」

んっ、言つ事はそれだけ？

妻は、いそいそと自分の部屋に行き、何やら仕事をしている。変だな。今回のプーティーは妻が言い出したことなのに。あんなに張り切っていた我が妻は何処に行つちやつたのか。今年も変化のない、閑な毎日が続くのか。筆者は心が広い。ま、人生とは、こんなもの。

何となく筆者は、落ち着かなかつた。物語は終っているのに、どうした訳か光谷宛にメールが二通届いた。

…私、結婚します。プーティーに行けなくなつたのは、十五日にお見合いがあつたんです。急だつたんで、どうしようかと思つたんですが、やっぱりお見合いの方が大切だし……。これからは彼と過ごす時間が私の総てです。呑み会、プーティーなんてもう要りません。光谷さん、結婚祝い沢山くださいね／理恵

…いやー、この前は済まなかつたね。今、暁子は家に居るよ。迎えに来てくれるのを待ってたんだって。いつも同じなんだ。夫婦は、これになくっちゃね。寿司にぎりについて教えてあげるよ。小さなおにぎりの上に寿司だねを置いたものなんだってさ。にぎり寿司って言つたらお寿司屋さんに悪いと思つたんだって。光谷さん、俺の女房って可愛いとこあると思わない。またプーティー遣つてよ。寿司にぎり持つて行くからね／四橋

(完了)

譚
綴

「
プーテイーへの招待
」

二〇〇四年二月七日

編集・発行者 エムツー・プラデオ

三谷 弘

禁無断転載・複写

M²plaDeo
Planning & Design Office

Copyright© H.Mitani